

榎本は「伝説」にはならなかった。「イシノヒカル、おまえは走った！」のイシノヒカルの強さも群を抜いていました。でも、イシノヒカルも「名馬」にはならなかった。この本に描かれているのは彼らの栄光の日々ではなく、その敗北への道程です。しかし、敗北はまさに彼らが生きた証しなのです。

にしやまのりゆき

西山教行／経済学部：フランス語・異文化論

『大国フランスの不思議』

山口昌子著
一般書 角川書店

1,600 円

フランスに対する日本人の思いには何か熱いものがある。アメリカやイギリスに向けるまなざしと異なり、それは絶えずあこがれに似たもので、片思いを思わせる。ところが、「フランス共和国」となると話は別である。華やかな文化的イメージを誇る「フランス」に対して、「フランス共和国」の顔には「国家」の二文字が峻厳に刻み込まれている。

本書は、これまで日本人に比較的なじみの薄かった「フランス共和国」の相貌をフランスの社会、政治、外交を通じて明らかにしようという試みである。著者は在仏 10 年あまりの産経新聞社の記者であり、その興味は現代フランス社会にも脈々と根付く共和主義の伝統へ向けられている。

GDP など経済指標の観点からは、日本のはるか後塵を拝するフランスが、なぜ国際社会においては大国として振る舞うことができるのか、なぜ高い発信能力を保持し、グローバリゼーションの時代にあっても、独自の世界観を維持できるのか、国境の壁が日ごとに低くなる時代にあって、なぜ国家に強力な国民統合の装置を求め続けるのか、本書は具体的な事例調査を通じてこれら一連の問いに対する答えを真摯に提供しようとしている。

アメリカの推進するグローバリゼーションの論理だけでは多極化する現代世界を解説することは困難である。「多極的世界」という概念ですら、フランス外交のしばしば提示するキーワードの一つであるだけに、「フランス共和国」という思想は、現代世界の多元性を読みほどこく有力な道具となるであろう。